

28. CEA の RIA についての研究——特に NCA に関して

宮崎 忠芳 (京府医大・臨検)
 梶田 芳弘 八谷 孝 吉村 学
 (同・2内)
 越智 幸男 細田 四郎 (滋大・2内)
 浜津 尚就 (同・中放)

抗 CEA 抗体と反応する正常組織中の NCAI を便中の NCA II について以下の実験を行なった。正常人便を PCA で抽出し 1 週間流水で透析したのを濃縮し、G-200 カラムに展開した。溶出ピークは 2 峰に分れ、第 1 ピーク (large 分画) は正常人血清の void volume に相当し、第 2 ピーク (small 分画) は 4 s albumin より少し遅れた部分に溶出した。蛋白量はほぼ同量であり、anti-CEA との交叉反応は Ouchterlony 法で large 分画のみ陽性であった。NCA 値は大部分が large 分画に見い出され、small 分画には痕跡的であった。large 分画を Anti CEA sepharose カラムにて affinity chromatography を行ない、吸着分画を ^{125}I でラベルし、G-200 に展開すると、radio activity は 2 峰性に分れ、void volume のやや後と 4S albumin より後に溶出された。

正常臓器の NCA を測定すると、脾、胃、甲状腺、肺の順になり心にはほとんど存在しなかった。各臓器を homogenate し PCA で抽出して G-200 に展開して NCA を測定すると、胃、甲状腺は NCA はほとんど void volume にしか存在しないが、脾、肺には 4S に相当する分画にも存在した。

従来 NCA II は分子量が 6 万ないし 11 万と報告されているが、今回の検討では分子量約 18 万程度と思われ、4S に相当する小さな分画にも、便中、組織中とも NCA が見い出された。NCA は大きな分画と小さな分画が混在していると推定された。

29. 血清フェリチンの臨床的検討

伊藤 秀臣 尾藤 早苗 森本 義人
 大城 徳成 (神戸中央市民・RI)
 玉木 長良 研原 隆 森 徹
 (同・内)

血清フェリチン濃度測定の tumor marker としての有

義を検討した。

第一ラジオアイソトープ研究所スバックフェリチンキットを用いた。指示書どおりの操作で 2～500 ng/ml の測定域が得られ、アッセイ内・アッセイ間変動係数は 10% 以内、回収試験も良好。希釈試験の成績から 6 倍希釈血清を用いた。健常者では、女性 10 例 34 ± 33 、男性 8 例 80 ± 32 ng/ml であった。200 ng/ml 以上を異常と判定したが、良性疾患中、消化器、胆道疾患は、ほぼそれ以下に、肝、肺疾患では、しばしば高値例がみられた。また血清鉄との相関は相関係数 0.338 にとどまり、Fe/UIBC 比との間には、全 75 例で 0.669 とよい相関が得られた。各種悪性腫瘍患者では、消化器癌の 30%、肺癌の 60% に高値がみられ、AML、ALL では、全例高値を示した。

次いでフェリチン濃度とダイナボット社 CEA RIA を対比した。CEA は 5 ng/ml 以上を異常とした。悪性腫瘍例 190 例では、両者で 16%、フェリチンのみで 22%、CEA のみで 16% に異常がみられた。ことに、未分化型肺癌では、フェリチンのみ異常例が多くみられた。良性疾患患者では、75% が両者共陰性であったが、false positive が両者で 2%、フェリチンのみ 19%、CEA のみ 4% を示した。ただし、フェリチン上昇例の大部分は肝疾患患者であった。

以上、血清フェリチンは Fe/UIBC 比・肝障害に関連して上昇するが、悪性腫瘍時にも CEA に近い異常率を示し、しかも異なった分布を示し新しい tumor marker として有用と考えられた。

30. 血清フェリチン値の臨床的応用 (第 1 報)

吉村 房子 石原 明 (天理・臨病)
 浜田 哲 (同・内分泌)
 高橋 豊 (同・血内)

血清フェリチンは、人体内貯蔵鉄と密接な関連があり、貯蔵鉄を直接反映する指標として用い得ることが明らかになってきた。今回われわれは鉄欠乏性貧血治療経過におけるフェリチン値の変動を追跡し、治療効果・再発の予知に関する知見についてまとめたので報告する。

血清フェリチン値は、治療前、治療中、後で差がみられ鉄欠乏性貧血の治療の経過に有用である。血清フェリチン値は骨髓の細網内皮系細胞内のヘモジデリンとある程度相関し疼痛を伴う骨髓穿刺による貯蔵鉄の測定に代